

保育士養成課程における最終年次ゼミナールの在り方 — 外部団体による自然体験活動事業への学生の参与観察参加の事例を手掛かりとして —

小野智一

東京福祉大学 保育児童学部 (伊勢崎キャンパス)
〒372-8831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1
(2022年10月17日受付、2023年2月2日受理)

抄録：本報告は保育士養成課程最終年次におけるゼミナール形式による学習の在り方について事例提供し、学生がゼミナールで学ぶ意義を見出そうとする仮説探索的研究である。保育士養成課程における最終年次のゼミナール学習をどのように位置づけるか。本報告では、ゼミナール形態の学習が「保育内容演習」および「総合演習」という資格取得のために必修の科目に設定された事例を扱った。保育職への要請として、近年は、子どもの育ちを支援する中で多様な環境を経験させることが求められている。本報告事例のような外部団体等の資源を活用した養成課程の教育環境の充実は、今後も期待が高まるであろう。

(別刷請求先：小野智一)

キーワード：保育士養成課程、ゼミナール、保育内容演習、総合演習

緒言

2018年施行の保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領より、「保育所」「幼稚園」「幼保連携型認定こども園」は幼児教育をおこなう施設としての性質を共有化することとなった。また、保育所保育指針においては「保護者に対する支援」が「子育て支援」と用語を改められ、保護者・家庭・地域と連携した「子育て支援」と変化してきている。保育者を目指す学生に求められる知的専門性や資質能力もまた変わり続けている。大学の保育士養成課程においても専門職としての知識面の専門性教育と、自ら学び直面した課題や困難に挑戦する自立した社会人の育成を目指す資質教育を両立することが求められている。多くの大学では上述の教育課題に対してゼミナール形態の学習を設定することで学びの質に変化を与えようとしている。特に最終学年に設定されるゼミナールは学部教育課程の集大成としての意味合いをもたせ、学生が学んできた専門性を背景に自発的な課題探究を促進することで大学卒業後も自立した専門職業人としての生きるための基盤を作ることを目指している。本稿では、保育士養成課程における、教育課程最終年次におけるゼミナール形式による学習の在り方について事例提供し、学生がゼミナールで学ぶ意義について有益な実践研究仮説を見出すべく、仮説探索的研究として着手したものである¹⁾。

事例の特徴としては社会的課題解決型事業に取り組むNPO法人の事業に学生が参画するところにある。本稿では「保育士養成」の観点からの意義について検討しているが、子どもの野外活動体験を外部機関と連携して実践するというテーマについては、一例を挙げれば、北欧で発祥した「森のようちえん」事業という先行事例がある。この事例については指導理念や保育者による安全管理という点からの指導者養成に資する先行研究が確認できるほか、保育内容領域「環境」において視点導入を試みる事例が報告されている²⁾。しかし、管見の限りにおいて本テーマにおけるゼミナール、保育内容演習、総合演習との関連から議論した研究は事例蓄積の少ない領域と判断できるため、本報告が貢献できる部分はあると考える。

研究対象と方法

(1) 学生が参加した事業の計画について

本研究で関わる事業を実施する主体は、現在NPO法人として関東A県より認証を受けた特定非営利活動法人Bである。特定非営利活動の種類としては(1)子どもの健全育成を図る活動、(2)社会教育の推進を図る活動としている。事業内容としては、①いじめに関する相談の対応と支援、②野外活動をとおした子どもの健全育成及び指導者養成、③いじめ問題に関する研究及び情報収集、④子どもの発育

相談及び教育助言、⑤その他この法人の目的を達成するために必要な事業としている³⁾。

以上のように、B団体は解決すべき社会的課題として「いじめ問題」を取り上げ、啓発活動を事業の中心に取り組む団体である。現時点までの事業の具体的な形態としては、啓発活動としての教育研究活動の成果を発表する「研究大会」、子どもの自立心を養うキャンプなどの野外活動を企画実施してきている。

本研究はこのB団体が実施する事業である子どもの自立心を養うキャンプなどの野外活動への参画を通して、学生の保育士養成課程における学びの総合化を目指す取り組みである。本報告では2019年8月に実施されたB団体事業である「子ども克己キャンプ」への参画事例を取り上げる。

「子ども克己キャンプ」事業はB団体がNPO法人化する以前から実践していた事業の一つで、趣旨としては「子どもたちにいじめに打ち克つ耐性を醸成するとともに」としている。

(2) 大学授業「保育児童専門演習・保育実践演習」について

関東C県にある私立D大学に設置されている保育児童学部にも所属する4年次学生を対象とした科目である。

「保育児童専門演習」は保育の内容・方法の専門科目として4年次春期に設定されており、「保育内容演習」を構成する1科目としての位置付けである。一方、「保育実践演習」は専門展開科目として4年次秋期に設定されており、「総合演習」を構成する1科目としての位置付けである。この両科目において取り組む授業内研究活動に、B団体の事業への参加を組み込んだのが本報告の実践事例である。また、春期「保育児童専門演習」の履修学生は構成を変えず、継続して秋期「保育実践演習」を履修することになり、この2科目がゼミ形式での通年指導機会として設定されている。D大学では「保育実践演習」の最後に各担当教員が指導した学生の活動成果の報告会を実施しており、保育の内容・方法についての総合的な演習として機能するようカリキュラムを構成している。

年間指導の経過については以下のようなものである。まず、「保育児童専門演習」第1～3回にて、子どもにとっての自然体験活動の意義および留意点を年間追究テーマとして設定することについての趣旨説明を行った。講義概要としては、『「しぜんであそぶ!」まるわかりガイドブック～「場」と「きっかけ」から身に付く36の動き～』（「幼児期の遊びを中心とした運動プログラムの推進事業」普及委員会、2018）を主な資料として、幼児期における自然体験活動の意義および先行事例のレビューを進めた。次に参加する

B団体の概要および事業の概要説明を行った。B団体との調整については筆者が担当し、学生の参加計画の作成とともに事業における業務の一部分担する方向で調整した。学生の事業への参加の意思確認ののち、本事業を事例とする参与観察型研究の実施を計画した。5月にはB団体指導者への質問紙および「子ども克己キャンプ」事業参加児童への半構造化インタビューの質問項目を作成するとともに、事業の一部分担として請け負った事業期間中の児童配布用「しおり」の作成に着手した。以降は実習または就職活動等一堂に会したゼミナールを実施することが難しく、個別に参与観察法および半構造化インタビューによる質的研究におけるデータ収集についてのレクチャーをするとともに、しおりに掲載する情報についての編集作業に取り組んだ。8月には「子ども克己キャンプ」事業に参加し、担当児童の支援および参与観察調査を進めた。9月はB団体指導者に対して質問紙調査を依頼し、回答を回収した⁴⁾。

次に秋期「保育実践演習」では、参与観察および質問紙調査から得た質的データについて内容分析を進めた。12月に学年全体の活動成果報告会にて作成する成果報告書のとりまとめが完了した。1月に報告会当日資料の取りまとめを行い、2月の報告会をもって年間の指導を完了した。

(3) 学習者について

今回の事例の単位を履修した学生は4名であった。うち1名（以下、Eと称す）は就職活動と参加するB団体事業の日程が重複したため、事業当日は3名の学生が参加することとなった。参加できない1名については、ゼミの年間追究テーマである「子どもにとっての自然体験活動の意義および留意点」について、先行研究のとりまとめを担当させた。具体的には、自然体験活動を通じた教育実践の取り組みの事例を取り上げ、野外活動型教育活動の動向についてまとめに取り組ませた。

事業に参加した3名の学生は一人ずつ担当児童が設定され、すべてのプログラムについて児童とペアで行動している。質的データの収集は、プログラム間の空き時間や移動中の時間など担当児童との自然なコミュニケーションの中から行うこととした。参与観察に当たっては、次のように要点を設定し、指導を行った。①参加児童からの聴取については、B団体自体が個人情報の取扱いについて写真撮影までにとどめていることを考慮し、得られた回答は録音ではなくフィールドノートを用意し記述記録で対応すること。②低学年児童からの聴取については他の児童とペアにするなど集団面談的な状況を設定して、他の児童の意見についての追従や反論を引き出すなど不安を感じさせないように配慮を試みること。③参加児童の体験充実が事業の本義で

あることから、データの収集ではなく児童の活動に対する支援を優先すること。以上は、今回の参与観察が学生にとって、課題解決に向けた調査研究の手法の実践の場であるとともに、学生自身の4年にわたる学習によって得た保育の内容・方法についての学びを試す場でもある点に留意したものである。

(4) 学習者へのフォローアップリサーチについて

本報告の事例実践がなされた2019年当時の当該科目履修学生4名を研究協力者とし、質問紙を送付し、回答を得た。2021年9月26日に全員の研究調査協力への内諾を得たことから着手し、同年に筆者所属機関にて研究倫理審査を申請した。2022年5月倫理審査承認を経たのちに全員から回答を得た⁵⁾。質問紙の主要な問いは次の2点である。①保育職を目指す上でキャンプなどの「子どもの自然体験活動」支援の経験について振り返る問い。②外部団体主催の行事に参加するにあたっての学生の反応についての問い。また、回答を得たのち、フォローアップリサーチを実施して、回答の意図など確認することとした。フォローアップリサーチについては研究協力者の希望から、全員LINE株式会社製のコミュニケーションアプリを使用し、筆者からのフォローアップクエスチョンに随時回答してもらった形態をとった。

以上から得られた質的データをもとに、実践の過程を考察したい。

結果

(1) 取り組みの経過について

① 学生が参加した事業の概要

2019年8月某日に1泊2日の行程でB団体事業「子ども克己キャンプ」が開催されている。この事業は、2016年より毎年開催されており、回を追うごとに少しずつ参加者が増え、2019年については、6名の参加(小学生5名と幼児1名)となった。事業の趣旨としては、子どもたちにいじめに打ち克つ耐性を醸成するとともに親の愛や便利な生活のありがたみを体感させることにある。1回の催行の定員は10名までの小規模グループで行い、テント設営、火おこし、野外炊事、ドラム缶風呂などの非日常的活動を親以外の大人に見守られながら思い通りにならないことを我慢したり、やったことがない作業を試行錯誤したりしていく中で子どもに味わわせていこうとするものである。

B団体からは指導者10名が参加し、そこにボランティアスタッフを依頼した2名で催行前日から後日撤収作業まで交代制で分担している。また、この年のみ1名の参加児童

の母親が車椅子介助の必要から同行している。ここに参与観察者としての学生4名が参加することとなった。B団体の指導者は小中学校教員が5名含まれているが勤務年数がいずれも5年未満の若手教員である。その他、社会福祉施設職員2名が本務でも児童との関わりがあるB団体の指導者となる。

また、2019年の事業は国立青少年教育振興機構「体験の風をおこそう」運動への参加事業として実施されており、この年から事業の広告物については一部、国立青少年教育振興機構より供与されたものを使用している。2020年と2021年には国立青少年教育振興機構子ども夢基金補助金交付事業に選定されており、事業内容の拡充が期待されていたが、COVID-19の影響により両年とも事業の実施を中止している。B団体は2019年にNPO法人化した。この時点は補助金交付を受けていない状況であった。よって、補助金交付決定は2016年より任意団体として催行してきた事業の実績について一定の社会的評価がなされたものと評価することができる。

② 「子ども克己キャンプ」事業のプログラムと実践の実態について

第1日目に軽井沢駅の北側にある矢ヶ崎公園に参加児童、指導者が集合した。保護者の同伴はここまでとして、以降、児童は担当指導者とともに2日間を過ごすことになる。公園で担当指導者の紹介と活動計画が確認される。ここで学生が作成したしおりが活用された。第1日目は、①開会式(キャンプ会場移動後)、②野菜収穫体験、③野外炊事体験、④レクリエーション(手持ち花火)、⑤ドラム缶風呂で入浴、⑥就寝というプログラムであった。第2日目は、①起床、②散歩、③朝食、④テント撤収、⑤おやつ作り(ポップコーン)、⑥閉会式、⑦牧場散策、⑧解散(軽井沢駅まで引率)となっていた。また、学生の関与について付言すれば、1日目の野菜収穫体験の場面については人員配置の関係でキャンプ会場待機となっており、参加児童の収穫体験中の様子については観察できなかった。

(2) 学生の参与観察について

事業には3名の学生(以下、各学生のエピソード紹介時にそれぞれF、G、Hと称す)が参加した。

Fは自身の児童期にキャンプ等の野外活動体験を豊富に経験する環境があり、外部団体の実施する子どものキャンプ活動の支援業務についても大いに興味を示していた。担当した児童は小学校2年生の双子兄弟のうち1名を担当した。学生と担当児童たちとのコミュニケーションはFがきっかけを作る会話をもち出し、それが、他の学生の担当する児童との会話につながるがあった。Fは、学生3人と

それぞれの担当児童が集まった状況では積極的にコミュニケーションをとり、半構造化インタビューの質問項目の話題につなげられるよう工夫している様子が見られた。筆者が観察した限りではFが質的データ収集について積極性が見られた。

Gは、外部団体の実施する子どものキャンプ活動の支援業務については、「どちらかというに興味がある」と回答していた。キャンプの活動自体も経験が少なく、子どもの支援以外に自分自身が野外活動に適應していくことに苦労したと語っている。担当児童は兄と参加した小学校3年生男子であった。実習等で触れ合う機会がなかった発達段階の児童ではあったが、移動の車中で1時間程度過ごす中で、徐々にコミュニケーションの頻度が高まり、児童の学校で流行している話題で談笑する姿が見られた。Gの担当児童はB団体の方針として兄弟での参加は別々のグループとして過ごさせることとしていたため、テント単位のグループでは最年長となる経験をしており、Gも担当児童の2日間を通しての変化を実感することができたという。筆者が観察した限りでは、参与観察における半構造化インタビューの実践は1対1場面ではほとんどなく、学生3名で集合状況になった場合に、他の児童とともに質問して回答を得るようであった。

HはF、Gの学生と自家用車で乗り合わせて会場入りすることから、B団体指導者同乗時は、児童のアクティビティ間の移動支援業務についても担当した。Gと同様に外部団体の実施する子どものキャンプ活動の支援業務については、「どちらかというに興味がある」と回答していた。担当児童は唯一の5歳の幼児参加者であった。テントサイトでの担当児童との関わる場面では、火おこしなど、興味を引く活動の場面に寄り添い、安全を心がけつつ見守る姿勢で対応したという。実習を含め、関わりを持つ機会がある発達段階ではあるが、野外での活動での子どもの動きや興味の示し方については、今回の活動に参加して初めて気づくことが多かったと振り返っている。筆者が観察した限りでは、幼児へのインタビューの進め方については、質問項目をH自身の手で発達段階に合わせたコミュニケーションに変換するなど努力する姿勢が見られた。また、支援者としての役割を第一とし、インタビューに固執しないでコミュニケーションを重ねることを心がけたことも振り返りでは回答していた。

F、G、Hは参与観察および質問紙調査より得られたデータをもとに、秋期の保育実践演習において事例研究を進めた。Eは、前述した先行研究の論点整理を進め自然体験活動の意義について近年重視される傾向を考察した。以上の成果を活動成果報告会にて発表することで本事例の実践は完結した。

(3) 学習者へのフォローアップリサーチについて

Eは前述の理由でキャンプに参加することはできなかったが、F、G、Hと同様に外部団体の実施する子どものキャンプ活動の支援業務についての関心について問うた。Eは、「どちらかというに興味がある」と回答している。

また、保育職を目指す上でキャンプなどの「子どもの自然体験活動」支援の経験についての意義を問うた設問については次のような回答を得た。この問いについては全員が「大変有意義である」と回答した。理由についてはフォローアップしたところ、E、Hは自然体験活動の非日常性に着目し、子どもだけでなく大人にとっても刺激を与える活動であることから、子どもと大人が同じ目線に立つことができる活動である点に意義を見出した。F、Gは自然体験活動時の児童への配慮の在り方や環境構成等の日々の保育実践に応用できる経験を得た点に着目し、保育の現場で役立つ実践経験という点に意義を見出した。

考察

本事例は保育士養成課程における「保育内容演習」および「総合演習」としての学習を通年のゼミナール形式の学習形態をとって構成したものである。通年ゼミナール形式による学習の利点としては、学習者の共同体形成を促しやすく、批判精神も許容できる健全な知的探究・創造空間を構成できることにある。よって、知識伝達的な学びよりもむしろ課題探究的な学びや価値創造的な創作活動を通した学びに親和性が高い。今回の事例では、学生に課題解決・探究のための手法としての研究法の教授と、子どもにとっての自然体験活動の意義について探究することを意図して、外部団体と連携した実践を試みた。

研究法については参与観察法を中心とした質的データの収集と分析を取り上げた。学生の実態からは、調査研究活動の実践として意識的に取り組んだFに見られるように一定の成果が得られたと考える。また、B団体の事業の意図に配慮した姿勢を示すHも研究倫理の点で望ましい実践となったと判断する。その一方で、半構造化インタビューで設定した質問項目の聞き取りにばかり意識を向けた結果、自然体験活動という非日常性ある空間にありながら日常の価値観を児童に語らせることがB団体の事業主旨に沿うものであったかについては検討すべき課題となった。また、児童から収集した質的データについては成果報告会資料では単純データの羅列にとどまっており、結果についての分析は不十分と言わざるを得ない。これはB団体指導者から得た質的データに比べ、児童の質的データは単語による回答など、エピソードの掘り下げが困難で構成概念を

読み説くことができなかったことも要因として考えられる。総括すれば「総合演習」としての研究法教授については、研究意欲や倫理の面で成果があったものの、質的データの分析手法については課題を残す結果となった。

子どもにとっての自然体験活動の意義についての探究は、フォローアップリサーチの回答から、十分な成果があったと評価したい。E、Hは「自然体験活動」を「保育の環境」という視点からとらえているのである。「保育の環境」は人的・物的環境や自然・社会環境などと指針では規定されているが、子どもとともに自然体験活動に参加する大人という人的環境の価値を重視する視点は、指針の趣旨を体現する見方といえる。また、F、Gのように、自然体験活動時の児童への配慮の在り方や環境構成等、日々の保育実践への意識が喚起されたことも、本報告の実践が「保育内容演習」の趣旨に適う取り組みとなっていたことを示すものである。その一方で今回の実践は、実習等学習活動として明確に位置づけられているものではなく、今回、学生の参与観察事例としたB団体の実践は「子どもの健全育成」という根本理念は共有しているものの、学生の学習について配慮する視点は主目的ではない。一般的な見方として、「保育内容演習」科目は、養成課程としては実習と組み合わせ、保育職としての資質形成を想定していると考えられる。しかし、子どもの育ちを支援する中で多様な環境を経験させる意義が重視されつつある中で、保育者自身の多様な環境に対する経験の蓄積は不可欠であろう。本報告事例のような外部団体等の資源を活用した養成課程の教育環境の充実は今後も期待が高まるであろう。付言すれば、今般、COVID-19によって実習機会すら奪われることとなった2020年世代の新規保育職取得者への体験機会の補償は、本報告の事例のような形をとってでも貪欲に求めていかなければならないと思えるのである。

結論

保育士養成課程における最終年次のゼミナール学習をどのように位置づけるか。本報告では、ゼミナール形態の学習が「保育内容演習」および「総合演習」という資格取得のために必修の科目に設定された事例を扱った。実践内容については担当各教員にかなり自由に裁量を許された部分はあるが、本事例のような資格認定に係る科目では、授業科目名はゼミナールと示されるものではないため、受講学生も保育士資格に関わる学びを想定したゼミ選択やテーマ設定を念頭において学習に臨む姿勢がある。資格課程から切り離れたゼミナールの設定の是非までは本報告では論じないが、ゼミナール形式の学習形態を実践できることによって、保育士資格養成課程における学びの質をどのよう

に充実させることができるのか、担当教員として今後も検証を続けたい。

繰り返しとなるが、保育職への要請として近年は、子どもの育ちを支援する中で多様な環境を経験させることが求められている。本報告事例のような外部団体等の資源を活用した養成課程の教育環境の充実は今後も期待が高まるであろう。

注

- 1) 学部ゼミナール教育の先行研究としては近年では、伏木田稚子による、学生にとってのゼミナール学習の困難さについての考察がある。伏木田(2019)は構成員や外部とのかかわりとその中で経験する苦労や困難の実態を、(a)授業内の学習活動を下地とする、(b)教員不在で学生が主導する、(c)遊びと学習の性格が混在するという3要素を抽出した。学習や体験に意義を見出すのはその体験が困難であり、それを克服しえたという達成感が伴うことで肯定的な視点が見出される。一方で、学生にとってはメンバーとの葛藤や取り組みのハードさに悩む様子も指摘されている。本報告では伏木田(2019)の指摘するゼミの風土や学習強度についての視点は取り扱うことはできなかったが、本実践を経験した学生が外部団体の1泊2日という短期の関わりの中でどのような関係性を作るか葛藤するなどゼミナール学習経験の質を議論する余地があることを認識できた。
- 2) 日本国内の実践団体の事例としては、特定非営利活動法人森のようちえん全国ネットワーク連盟を挙げることができる。(https://morinoyouchien.org/, 2022年12月8日閲覧。) 指導理念の考察としては、大道・山田(2022)による保育者の語りについて質的データを分析した事例がある。また、養成校科目への導入事例としては後藤(2015)などがある。
- 3) 大学教育とNPO法人に代表されるような社会的課題の解決を目的として事業を行う組織との連携については拙稿(2020)にて大学院授業を事例として報告している。また、今回連携したB団体についても同様に拙稿にて概要を報告済みである。よって本稿ではB団体の組織概要及び沿革については割愛している。
- 4) 学生が取り組んだ参与観察と児童への半構造化インタビューおよびB団体指導者への質問紙調査の内容については、学生による研究成果にあたるため本稿での言及は学生指導の内実を説明する上で必要最低限の記述にとどめるものとする。
- 5) 付記参照。東福大倫審2021-12。

付記

本稿にて取り上げた団体、個人については、個人情報保護の観点から、文中では「A団体」等の記号で置き換えしている。また、研究上使用したデータに関する収集・保管については、研究倫理基準に準じて遂行していることを付記する。

引用文献

大道香織・山田千愛 (2022) : ドイツの森の幼稚園における子どもに対する保育者の配慮. 日本社会福祉マネジメント学会誌 **2(1)**, 14-26.

小野智一 (2020) : 大学院研究指導と社会的課題解決型事

業との連携のあり方—大学院教育社会学特論における取り組みを中心に—. 東京福祉大学・大学院紀要 **11**, 59-64.

後藤みな (2015) : I. ミクリッツにみる森の幼稚園教師に求められる知識と技能—領域「環境」との関連に着目して—. 日本科学教育学会研究会研究報告 **30(6)**, 79-84.

伏木田稚子 (2019) : 学部ゼミナールの授業外活動における他者とのかかわりと苦労や困難に関する一考察. 日本教育工学会論文誌 **43**, 165-168.

「幼児期の遊びを中心とした運動プログラムの推進事業」普及委員会 (2018) : 「しぜんであそぶ!」まるわかりガイドブック～「場」と「きっかけ」から身に付く36の動き～. 国立青少年教育振興機構, 東京, pp.2-3.

The Report of the Final Year Seminar in Childcare Teacher Training Programs:
A Case Study of Students' Participation in Nature Experience Activities
by an External Organization

Tomokazu ONO

School of Childcare and Childhood and Early Childhood Education,
Tokyo University and Graduate School of Social Welfare (Isesaki Campus)
2020-1 San'o-cho, Isesaki City, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : This report is a hypothesis-exploratory study that provides a case study on the nature of seminar-style learning in the final year of a childcare professional training program, and discovers the significance of students' learning in seminars. How to position seminar learning in the final year of childcare teacher training programs? This paper deals with a case in which seminar-style learning was set as a compulsory subject in the "Childcare Content Seminar" and the "General Seminar" in order to obtain qualifications. In recent years, childcare professionals have been required to experience a variety of environments in order to support children's growth. In recent years, childcare professionals have been required to experience a variety of environments in order to support children's upbringing. It is expected that the educational environment of training courses will continue to be enhanced by utilizing the resources of external organizations, as in the case of this report.

(Reprint request should be sent to Tomokazu Ono)

Key words : Childcare teacher training course, Seminar, Childcare content exercise, Comprehensive exercise

